

505  
8

〇  
複写

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10<sup>19</sup> 1 2 3 4 5

始





5058



童話新集

蛙の王様

順三郎著

花や待てく  
池の花  
舟を漕ぎく  
花とろと  
追えどもく  
逃げて行く  
お池の中の  
赤い花

美しい花  
童話



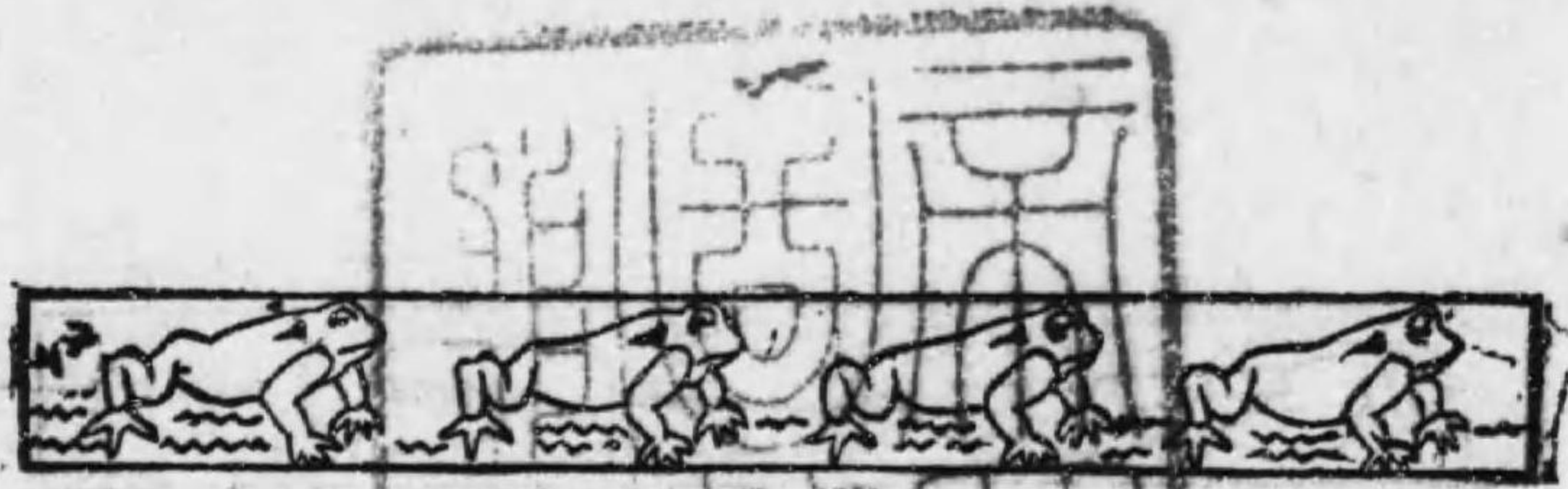
正男作





花いしく美





見出

- 1 些細な事(頁二)
- 2 美しくしい花(口繪)(頁一二)
- 3 苜蓿の衣服(挿書)(頁一九)
- 4 鬼女の面(頁三〇)
- 5 茄子の化物(挿書)(頁四一)
- 6 少女の機轉(挿書)(頁四九)
- 7 幸福の日(頁五八)
- 8 善悪二人兄弟(挿書)(頁六九)
- 9 雷公の醫者(頁八一)





- 10 卵たまごの行方ゆくへ(挿書さしあ)(頁八六)
- 11 お化お化けの頓死とんし(挿書さしあ)(頁九五)
- 12 歌うたよみ娘むすめ(頁一〇六)
- 13 まぐれ當りあたり(挿書さしあ)(頁一二四)
- 14 蛙かへるの王様わうさま(頁一三七)



新童話 蛙の王様

順三郎 著

一 些 二 細 三 事

お父様とうさまの所ところへ御客様おきやくさまがあつたので、朝あさの用事ようじが手てをく  
れになつて、家うちを出たのは九時二十分前ぶんまへ、學校がっこうまでは小  
半里はんりもあります、小學校せうがっこうの一年級ねんきゅうから尋常じんじやう五年ねんの今日けふま  
で、一度いちども遅刻ちこくしたことは無いのですから、今日けふばかり

些細な事



遅れたくないものだとお君は駈けるやうに急ぎました。学校の始業は丁度九時になります。

江戸坂を上つてしまふと、少し疲れて來ました。ちよつと足をとめて向ふを見ると、田舎のことですから一面に畑が續いてゐます、麥の延びたのが青畳を敷いたやうに見えます、畑と畑との間を縫うて灰色の小徑が小學校の門へ續いてゐます、その道の所々に三人五人位づゝ一團りになつた子供が行きます、まだ遅くはなかつたと思ふと、お君はホツと安心しました、お高と云ふ友達が、坂の上でお君を待つてゐました。



「お高ちゃんお早う。」

「お早う、今日は君ちゃんはいつともより遅かつたわね。」

「え、家にお客様があつていろいろ用事をしてゐたものだから。」

「さう、あたしね貴女の影が見えたから先刻から待つてゐたのよ。」

「有り難うよ。」

と言つて、お君は莞爾と笑ひました。

それから二人はつれ立つて行きました、畑と畑との間の道ですから、變に曲りくねつてゐて、先が見えてゐて





も中々遠いのです、と見ると、畑の中へ人の歩つた跡が道のやうになつてゐます、そこだけは青い麥が踏み蹂られて、所々枯れかゝつてゐます、た高はずん／＼その畑の中へ入つて行かうとするのでありました。

道が變に曲りくねつてゐますから、その畑の中を通つて行けば大層近いのです、誰でも／＼道のやうにして歩つてゐますから、た高もそのつもりで、通りぬけやうとしたのです、けれど、た君は其所を通つたことはありません、若しか友人同志で通りかゝつてもお君はいつも普通の道を廻つて行きました、ですが今、た高がその畑



の中へ入らうとするのを見て、はつとして呼びとめました。

「た高ちゃん、そつちへ行つちや悪いわ。」

「え？、何アに？」

と、た高は振りかへりました、た君の言葉がよく聞き取れなかつたのです。

今までは一人で通らなかつたゞけですが、それでは不可ない、悪いことはどんな些細なことでも悪いのだ、自分が悪いことをしないからいゝと云ふ譯ではない、悪いことが気がつかずに、平氣で行つてゐる者がある、さう





云ふ友人に悪いことをしないやうに教へるのは、友人としての義務だと、先生は教へて下さつたと、お君は思ひついたのですから、

『そんな所通つちや悪いわ。』

と、再びた高に言ひました、た高は變な顔をして、

『だつて、役場へ行く大人の人だつて通るもの。』

と、言ひました。

見ると、中折帽子を被つて、袴をはいた人が行きま  
す、お君は苦笑ひをして。

『人がするからつて、悪いことをしちや不可いわ。』



『こんなこと、其那に悪くはないわ。』

『どんな些細なことだつて、悪いことに違はないつてい  
つかも先生が言つたぢやないかね。』

『さうね、でも先生は見ちやらないから、知れつこあり  
やしないわ。』

『だつて何時か知れるわ、それに人が見てゐないからす  
る、見てゐるからしないつてもものぢや無いと思ふわ。』

『さうだわね。』

と、た高は言葉につまつて、ちつとた君の顔を見るとき  
何時にないきつぱりした所があつたので、何となく自分





の言葉の軽々しかつたのを恥かしいと思ひました。

「君ちゃん、私悪かつた。」

と言つて、足をかへして本道へ戻り、お君とつれ立つて歩き出しました。

すると、あとから靴の音がしたので、二人が言ひ合せたやうに振りかへつて見ると、それは学校の高村先生でした、丁寧にお辭儀をすると、先生もにこつと笑つて、その帽子を取つて挨拶をしました、先生が通りすぎると、

「まあ、君ちゃんの言ふことを訊いてよかつたね、何時



誰が見てるるか本當に分らないものね。」

と、お高は言ひました、お君も何となく嬉しく感じました。

学校へつくと、すぐに始業の鈴が鳴りました。

いつも月曜日の例で朝は講堂修身でした、全校の生徒がみんな講堂へ揃ふと、校長先生はずつと進んで教壇に立ちました、先生方はみんなその傍に並んでゐます、お君が顔をあげて見ると氣のせい、高村先生が、ちつと此方を見てゐるやうでした、外の先生方もみんな自分を注意してゐるやうな氣がしました。





『千丈の堤も蟻の一穴から破れると云ふことがありま  
す。』

と言つて、校長先生は一同を見廻しました、そして尙  
言葉をついて、

『その理由は、どんな丈夫な堤防でも、小さな蟻の穴が  
あると、そこから水がしみ込んで、終ひにはくづれて役  
に立たなくなると云ふことです、この位のことには好いだ  
らう、こんな些細なことは悪くはあるまいと云つて、  
悪いとも氣づかずにした、少しばかりのことが積り積  
つては人にどんな迷惑をするか、又自分の心をどれだけ



汚すかと云ふことは、此の言葉から考へて見ても分りま  
す。』

と言つて校長先生は、一同を見渡しました、高村先生  
はお君を見て莞爾とお笑ひになりました、お君はハツと  
して、頭を下げてしまひました、胸が轟いて來ました、  
顔があつくなつて來ました。

それからのことは言ふまでもありません、校長先生は  
今朝の、お君の行爲を大層褒めて、それからいろ／＼と  
教訓のお言葉がありました、お君の話が村中へ知れ渡つ  
たときには、もうその畑の間の道を通るものはありませ





美しい花  
んでした。

## 二 美しい花

池の中に美しくしい花が咲いてゐました、この美しくしい花は風につれて、小波の上を彼方此方と動いてゐました、池は周囲が十七八町もある大きな池なのです。

『綺麗な花だなあ。』

利夫はしばらく見惚れてゐましたが、池の中に咲いてゐるのですから、取るここは出来ませんから、その儘池の端をめぐつて、向ふの岸の方へ歩つて行きました、そ



のあとから十二三の女の子が来ました。

『あゝ綺麗な花！欲しいわ。』

と、思ふと、矢も楯も堪りません、裾をはし折つて池の中へ這入つて行きました、池は泥深いので、ぶくぶくと足が埋まつて動くことも出来ません、困つて泣いてゐると、十五六の男の子がやつて来ました。

『お前さん、如何して泣いてるの。』

と、訊きました、女の子は心細げに、物哀れに、  
『あたいね、あの花を取らうと思つて池ん中へ這入つたの、そしたら泥で動けなくなつちやつたの、後生だから

美しい花





助けて頂戴。

『お轉婆さんだね。』

と、言ひながら、その男の子は女の子を助けあげました。見たが、見ると、なる程美しく花が咲いてゐますから、急に自分も欲しくなり、

『僕が取つてやらう、僕は水泳をしつてるから譯はな  
いや。』

こ、言ひながら、すぐに裸體になつて池の中へ飛び込みました。

その男の子は、水泳は上手でしたが、泳げば泳ぐ程波

が立つて来て、一尺前へ進めば花もやはり一尺波にゆられて彼方へ行つてしまふ、急いで泳ぐと大波が立つて花は波をかぶつて見えなくなり、靜かに泳いでると、何時まで立つても手が届かないので、とう／＼花をこる事が出来ませんでした。

そればかりではありません、いくら水泳は上手でも、身體が疲れて来て仕方がありません、もこの岸へ歸らうと思つても手足が思ふやうに行きません、此の儘でゐれば溺れ死するより他仕方はないのです、男の子は悲しくなつて泣き出しました、見てゐた女の子も、自分を助け







あげてくれた子が溺れ死にさうなので、びつくりして、『誰か来て下さいよう、大變ですよう。』

と、呼びました、するとその聲を聞きつけて、その邊の畑に仕事をしてゐた大人の男が駆けつけて來ました、此の有様を見ると、驚いてその側にあつた小船に乗つて溺れて死にさうになつてゐる男の子を救ひあげました。

『一體どうして此んな池へ入つたのだ。』

と、聞きますので、男の子も女の子も、口を揃へて、中々美しい花のあることを話しました、大人の男もそれを見て、



『なる程美しい綺麗な花だ、然し、お前たちも餘り智恵がないよ、此の船に乗つて取れば雑作もないぢやないか、どれく、おれが行つて取つて來てやらう。』

と、その人がこんどは船に乗つて、その花の咲いてる方へ漕いで來ました、船が花に近づくとき次第に波が起つて來て、花はだんく船から遠くなつて行くのです、いつそのこと、棹でかき寄せやうと思つて、棹を出すと花はひよいと頭を水の中へかくしてしまつて、中々取れないのです、船を漕いで花のそばへ寄らうとすると、花が出て、さらつて行つてしまふ、どうにも斯うにも仕方が



ありませんから、その人も諦らめて船を岸へ戻して歸つてしまひました。

そのうちに、花は向ふの岸へ風に吹き寄せられてゐました、すると、そこを通りかゝつたのが、一番はじめに花を見つけた利夫です、池の周囲をめぐつて、此方へやつて來たのです、見ると先刻の美しい花が岸に流れついでてゐます。

「おやく、綺麗な花がある、先刻のごちつとも違はな

い。」  
と、言ひながら、手を延すと、わけもなく取れました



ので、利夫は大喜び、

「家へ歸つてお母さんに見せやう。」

と、言つて持つてかへりました。

餘り欲しいものを、慾深くしたり、焦つたりして、早く取らうとする者はかへつて取り損ふものです。

### 三 芦穂の衣服

昔、支那の魯と云ふ國に閔損と云ふ子供がりましたお母さんに早く別れて、繼母に育てられました、此の繼母にも二人の男の子が出來ました、繼母は、餘り心が







けの良くない女でしたから、自分の腹を痛めた子供は目の中へいれても痛くないやうに可愛がりましたが、継子の閔損を悪み、平常箸のあげ下しにも叱言を言ひました。が、閔損は少しも繼母を恨む心はありませんでした。二人の弟たちには旨いものを呉れても、兄の閔損には不味いものを呉れても、兄の閔損には不味いものを呉れても、兄の閔損には不味いものを食べさせいつも汚ない着物を着せて置きました。加之に、お父さんにあること無いことを云付けますので、可哀想に閔損はお父さんにまで叱られてゐました。

ある日のこと、お父さんは三人の子供をつれて、近所



にある花園へ散歩に出かけました。そのうちにお父さんは、

「これく、お前たち、わしは疲勞れたから車に乗つて見やうと思ふが、お前たちどの位力があるか、ためしにわしの車を引いて見なさい」

と言ひながら車に乗りました。

支那の車と云ふのは、今の人力車のやうなものです。初めに兄の閔損が曳きましたが、どうしたものか、手足が凍れてとても曳くことが出来ません、お父さんは少し機嫌の悪い顔で、





弟の着物は  
綿澤山  
兄の着物は  
薬ばかり  
泣いた涙が  
お金なら  
私も綿を  
買ひませう

蘆穂の着物

童謡

正男作



蘆穂の衣服

『何と云ふ意氣地のない奴だらう、ちや弟たちが引いて見な』

と、言ひましたので、今度は次の弟が曳きました、すると、年少の弟は

『車位譯はないやア』

と言ひながら、少しも重い風もなく曳き出しましたので、お父さんは是を大層喜ぶと同時に大層腹を立てました、そして車を降りて杖を右の手に持ち直し、

『これ損、前へ出なさい』

『はい』





芦穂の衣服

『何と云ふ意氣地のない奴だらう、ちや弟たちが引いて見な』

と、言ひましたので、今度は次の弟が曳きました、すると、年少の弟は

『車位譯はないやア』

と言ひながら、少しも重い風もなく曳き出しましたので、お父さんは是を大層喜ぶと同時に大層腹を立てました、そして車を降りて杖を右の手に持ち直し、

『これ損、前へ出なさい』

『はい』

童謡

芦穂の着物

正男作

弟の着物は  
綿澤山  
兄の着物は  
藁ばかり  
泣いた涙が  
お金なら  
私も綿を  
買ひませう





「はいでは無い、お前は何と云ふ横着者だ、年少の弟でさへも重げもなく車を曳いたのに、兄のお前が曳けないと云ふのは何と云ふ意気地のないことだ」  
「お父様済みません、どうぞ勘辨して下さい、今度は曳きます」

「今度は曳く？それでは先刻はどうして曳けなかつたのだ、お父さんを馬鹿にして曳かなかつたのだな」

「そんな事は御座いません」

「何を言ふのだ、この横着者め」

こ、言ひながら、お父様は持つてゐた杖で閔損の背を

青藤の衣服







ピン／＼と打ちます、閔損は逆らはず打たれておりました  
 が、その内に餘り強く打つたので、衣服が破れて、中か  
 ら芦穂が出て来ました、お父様は、  
 『た、これは如何したと云ふ事だ』  
 と、びつくりしてしまひました、尙よく調べて見ると  
 閔損の着服には少しも綿が入つてゐませんが、二人の弟  
 の着物はふく／＼と綿が澤山入つてゐて、いかにも暖か  
 さうです、餘りの事にお父さんは何とも仰有れませんで  
 した。

今は丁度冬の最中で、どんなに綿入の着物を重ねて着



ても、まだ寒くつて仕方がないのに閔損の衣服はうすつ  
 べら芦穂が入つてます、それを黙つて大人しく着て少し  
 も繼母さんを恨む心のない閔損の心がけが、我子ながら  
 可哀想になつて来たので、涙をほろ／＼と流しました。  
 『損や勘辨してくれ、お父さんが悪かつた、お父さんは  
 今まで、繼母さんの言ふ事はかり信用してお前を叱つて  
 ゐたが、此の着物の様子から考へて見ると、お前にはち  
 つとも悪い事はない、あの繼母がみんな拵へことをして  
 お前を叱らせやうとしたことに違ひない、わしは實に馬  
 鹿ものだつた。』





「い、えお父さん、お母さんが悪いのではありません、わたしが悪いのです」

「いや、左様ではない、わが子のに差別をするやうな繼母さんはもう家にをくことは出来ない、すぐに追ひ出してしまふ。」

と、火のやうになつて家へ歸り大きな聲で繼母を吐りつけて追ひ出してしまふ」

としましたから、閔損はお父さんの袖をたさへて、

「お父様、それはつかりは勘辨して下さい、繼母さんを追ひ出すことだけは止めて下さい」



「何を言ふのだ、お前を憎がる母さんを追ひ出してしまふのぢやないか、お前はかへつて喜んでいい譯ぢやないか。」

「私はもう、子供とは言ひながら大きい兄ですから、何でも辛抱しますが、今の繼母さんを追ひ出さずつて、また新しい母さんが御入来になれば、二人の弟たちは可哀想に年も行かないのに苦勞しなければなりません、わたしは如何な辛いことでも我慢しますから、二人の弟を可哀想だと思召して、どうか今の繼母さんを追ひ出すことはやめにして下さい、損が願ひをします。」



「ウーン」

ごばかり、お父さんは、閔損が弟を可愛がる心に感心して、さすがに繼母を追ひ出しかねて居りました、初めからこれを訊いてゐた繼母は、悪い／＼と思つてゐた繼子の閔損が、自分を庇護つてくれるので、今まで自分が損を悪んでゐたのが恥かしくもあり、申譯無くなりましてので。



「損や、わたしが悪かつた、どうか勘辨して下さいよ」と、涙を流して詫りました。

「いゝえ、母さんは些とも悪いことはめりませんみんな

私が悪いのです。」

「そんなことは無い、そんな事は無い、勘忍しておくれみんなわたしが悪かつたのだから」

と、泣きながら言つてお父さんにもいろ／＼詫び入りましたので、お父さんも心が解け、繼母さんをその儘に家に置くことになりました。

それからと云ふものは、繼母さんは丸で生れ變つたやうな善いお母さんになりました、二人の弟も、兄の損も少しの差別もなく可愛がつてくれましたので、お父様は大層喜びました、親子兄弟仲よく睦ましく暮し、後には





兄弟三人とも、立派な人になつたと云ふことです。

#### 四 鬼女の面

丹波國篠山から五六里ばかり山奥にお久と云ふ娘が  
りました、片田舎の百姓の家に生れて、家も貧乏だつた  
ので篠山の町のある商店へ子守奉公に来てゐました。

お久に生來孝行の心があつく、少しばかりのお給金を  
貰つても、自分は一錢も使はないで、みんなお父さんや  
お母さんに送つてやりました、朝晩はきつと自分の家の  
方を眺めてはお父さんやお母さんの無事にあるやう神様



にお願ひしてゐました、一かやうに親孝行の子供でしたか  
ら、主人にもよく使へましたので、家内中のものが、お  
久やくと言つて目をかけて可愛がつてくれました。

ある日、自分が守をしてゐる主人の子供の所へ、親類  
の者から、女の面と鬼女の面を送つてくれました、主婦  
は自分の子が恐がるだらうと思つて、鬼女の面は藏つて  
置いて、女の面ばかりをやつて玩具にさせました、すると  
お久はこの女の面を見るたびに涙を流したり何かして、  
さもく欲しさうでしたから、主婦は、利口なやうでも  
た久は子供、この面が欲しいのかしらと思つたものです





から。

「久ヤ、お前この面が欲しいのかい。」

「はい。」

「ご、もちんぐしてゐます。」

「欲しけりや欲しいいつて言ひなさい、この面はお前にやつてもよいのだから」

「あの、この面を私に下さいますか、ごうも有難う存じます。」

「ご、お久は涙を流して喜びました。」

「まあ、お面を貰ふのがそんな嬉しいのかね」



「はい、あのこのお面の人が、うちの母さんに似てるもんですからそれで……」

「可哀想に、ちや、お前にあげるから部屋へ藏つて置いて、毎日母さんにお逢ひなさい。」

と言つて、そのお面をくれたのでお久は大喜び、それから毎日ひまさへ有れば、此のお面を取り出して、何か言つては泣いたり笑つたりしてゐました、それを、朋輩の女中がおかしがつて、悪戯半分面白半分女の面と鬼女の面と取り換えて置きました、何にも知らぬお久は、その日も例の通り、お母さんに逢ふつもりで女の面を出し





て見ると、こは如何に、面は似ても似つかぬ鬼女の面になつてゐます。

『大變だ、これは唯事ではない、お母さんに何か異状があるのぢやないかしら、女の面が鬼女の面に變るなんて本當に如何したのだらう。』

と、思ふこ、さあもう氣になつて堪りません、急いで主婦の所へ行つて。

『主婦さん、済みませんが今日これから少しの間お閑を下さい、私は急に家へかへつてお父さんやお母さんに談をしなければならぬことがあるのですから』

『まあ、餘り急ぢやないか、そりやね、閑をくれと云ふのをやらない譯ぢやないが、今日はもう遅いから明日にしたら如何だね。』

『どうしても今日でなくつちや不可いんです。』

『もう遅いよ、途中で日が暮れてしまふと恐ろしいから明日の朝早くしたら如何だね。』

『何だか、あの私一日も早く歸りたいんです、日はくれない、山道には馴れてるから大丈夫ですよ』

『それ程に言ふなら行つといで』

と、閑をくれたので、た久はいそくと仕度をして出







かけました、誰にも知れないやうに鬼女の面を懐中へ入れて大急ぎで歩きました。まだ十二三歳の少女のことです。峻しい山道が中々捗どらず、二里ばかりも来たかと思ふともう日が暮れて仕舞ひました。

梢を鳴らす、風の音が、身の毛も慄立やうに覺えたけれど、お久は親に逢ふことの嬉しさに、何事も考へずに走つて行つたが、ふと見れば行手の松の木蔭に、荒くれ男五六人、焚火をしてゐたが、お久を見ると。

「わゝ、お娘様前何所へ行く」

「……………」

お久はテツキリ泥棒だと思ふと、恐ろしさに聲も出なかつた、厭がるお久の手とり足とり、悪者どもは、お久を焚火の傍へ引つばつて來ました。お久はどうなることかと、涙も身に添はずぶるゝ慄えてゐましたが、さつと吹き下す山風に、火の子がはらゝと顔に飛びかゝりました。驚いて袖で打ち拂つてゐましたが、そのうちに思ひついて、懐中に藏つてあつた鬼女の面をかぶつて火の子を避けやうとしました。

その時、丁度火は下燃えになつてゐましたが、又してもばつと燃え立つ火影に、悪者どもはお久の面を被つ





た顔を見て、

『やあ、化物ものだ。』

『こりや大變、小娘と見せかけたのはさては化物か、逃げろく。』

と言ひながらバラくご逃げて行きました。

お久は九死に一生を得たやうな心持ちで、急いで自分の家へ歸りました、家のものは、みんなお久がこんな夜おそく歸つたのを不思議に思ひましたが、主婦さんから貰つた女の面が、母親に似てゐるので、明け暮れそれを見るのを楽しみにしてゐたところ、今日見れば急に鬼女



の面と變つてゐるので、何か母親に異状があるのではな  
いかと心配して、無理やり暇を貰つて歸つたのと云ふ  
ことを訊きますと、母親は涙を流してお久の孝行な心を  
喜びました、お久も心配して來た母親が丈夫なので、こ  
れも嬉し泣きに泣いてゐましたが、やがて思ひついて盜  
賊に逢つた談をしました、ろの鬼女の面を被つたので、  
盜賊が化物と見ちがへて逃げてしまつたと云ふことを話  
して、母親と二人で笑つてましたが、父親は

『それは怪しからぬ、この村の近くにそんな泥棒があつて  
は、村の人も難儀する、ひとつわしが行つて縛つてくれ



る。』

と、出かけて行きました、泥棒はそこにはあませんでしたが、盗み溜たらしいお金が澤山ありましたのでそれを殿様に訴へて出ますと、殿様はお久の親孝行に感心して、そのお金をみんなお久に下さいましたので、お久はもう奉公に行かなくもいやうになり、家にゐてお母さんの手助けをしながら、針仕事などを習ひ、よい人になつたと云ふことです。



## 五 茄子の化物

お寺の和尚さんが、檀家の御法事に小僧をつれて行きました、その歸途でした、もう日の暮れ方でした、小僧に提灯を點けさせて、いろ／＼話をしながら歩いてゐました。

『小僧や、お前疲れたらう少し休んで行かうかな。』  
『いゝえ、少しも疲れはしません、お師匠さんは御老人ですから、さぞ御疲れで御座いませう、どうかまあゆつくりお休みなさい。』







ご、そこにあつた石の埃をはらつて、老年つた和尚に腰をかけさせました、すこし休むと疲れもとれました。  
 『小僧や、大分よくなつた、さあもう一息ちや、奮發して出かけやうかな。』

『左様いたしませう。』

と言ひながら、小僧は、荷物を背負て先に立ち、やがてお寺の門の前まで来ますと、何所からともなく吹いて来る山風に、提灯の灯が消えました、然し、もうお寺の門の前まで来てゐるのですから、小僧は、

『お師匠様、提灯を点けませうか。』



『さあもうよからう、この儘で行かう。』

『左様で御座いますか、お危なう御座いますから、御用心なさいませ。』

『お前も氣をつけたがよいぞ。』

と言つてゐるうちに、和尚さんは、何うしたのかびつくりして飛び上りました。

『あッ』

『和尚様、如何なさいました。』

『ああ、どうも大變なことをした、墓を踏みつぶした、どうも慘たらしいことをした、南無阿彌陀佛々々々々。』





「蟻蛙をですか、うれは大變ですね。」  
 「どうも大變ぢや、お前も知つての通り、おれは佛に仕  
 へる出家で、殺生は大嫌ひぢや、他のお寺は牛も魚も構  
 はず食べるやうぢやが、わしはどうも活物の肉は食べら  
 れない、虫を殺すのも可哀想でならぬ、それなのに、現  
 在寺の庭にゐる蟻を踏み殺したかと思ふとどうも慘らし  
 うてならぬ、南無阿彌陀佛々々々々々々。」  
 と、涙をこぼさんばかりに言ひながら、玄關を上り方  
 丈の方へ行きました、和尚さんは情深い、性質のやさし  
 い人でしたが、どうしたのか今晚に限つて、顔色も悪く



小僧や寺男にも碌々物も言はず、早く床を延べさせ、晩  
 の御飯も食べずに寝ました、  
 「然し、中々寝付れないと見えてしばらく溜息をついて  
 ゐました、子僧は大切の和尚様が此な風ですから心配で  
 なりません、  
 「和尚様御氣分は如何ですが、御背中でもさすりませう  
 か。」  
 「よいよ、惨いことをしたよ、あゝ可哀想に、南無阿彌  
 陀佛々々々々々々。」  
 と、繰りかへしてゐるばかりで仕方がありません、然





茄子の化物

し、この小僧さんは中々親切の、師匠思ひの小僧でしたから、

「和尚様、そんなに御心配なさつても、知らずになすつたのですから仕方がありません、明日早くお經をあげて町噺に葬つてやつたらよろしう御座いませう。」

「なあ、それも左様だな、然し何にしても可哀想なことをしたよ。」

「少し御足を揉みませう。」

と、傍へ寄つて、足へさわつて見ると大變です、丸で火のやうな熱です、小僧はびつくりしました、

重 話

茄子の化物

正男作

化けた、化けた  
大きな茄子が  
ゴロリところんで  
墓がへる  
お寺の和尚さん  
黙抜いて  
グル／＼眼玉を  
まはした





茄子の化物

し、この小僧さんは中々親切の、師匠思ひの小僧でしたから、

『和尚様、そんなに御心配なさつても、知らずになすつたのですから仕方がありません、明日早くお經をあげて町囃に葬つてやつたらよろしう御座いませう。』

『なあ、それも左様だな、然し何にしても可哀想なことをしたよ。』

『少し御足を揉みませう。』

と、傍へ寄つて、足へさわつて見ると大變です、丸で火のやうな熱です、小僧はびつくりしました、



童 謡

茄子の化物

正男作

化けた、化けた  
大きな茄子が  
ゴロリところんで  
墓がへる  
お寺の和尚さん  
腰抜いて  
グル／＼眼玉を  
まーはした





『これは大變な御熱で御座います、少し冷してさしあげませう。』

裏の山の井戸から、冷たい水を汲んで来て、一晚中寝もしないで看病しましたので、和尚さんも明け方から少しは快くなりました、小僧もほつと安心して、うれにしても昨夜の墓は如何したらうか、可哀想なことをした、和尚様が御病氣だかう自分でね經をあげて葬つてやらうと思つて、門の前から立關の所を調べて見ると、墓などはありません、道の真中に大きな茄子がひとつ、めちやくくに踏みつぶされてゐました。







『はゝあ、これが昨夜の墓だな』

こ、小僧は大急ぎでそれを拾ひあげて、和尚の所へ来ました、和尚も丁度目を覺してゐました、

『たゝ、小僧かい、大變厄介をかけたよ。』

『御目覺で御座いますか、和尚様御安心なさいまし、あなた踏みつぶしたのは墓では御座いませぬ。』

『何、墓ではない？。』

『はい、これで御座います、昨今拾つて参りました、御覽下さいまし。』

と、さし出す茄子を見るこ、和尚も



『ああそれはよかつた。』

と急に顔の色がよくなりました、やがて日が出ると、

いつも庭へ出て遊ぶ墓が、のそくこ這ひ出して來ましたので、和尚はそれを見ていよく安心し、その日の夕方からはすつかり全快つてしまひました、何とおかしな話ちやありませんか、何でも物事はよく氣をつけなければなりません。』

### 六 少女の機轉

獨逸のある町に、煉瓦師の頭領がありました、三月ば

少女の機轉



かり前から、ある工場の仕事をしておりましたが、今日はいよいよ一番むづかしい煙突の出来上る日なのです、二人の娘はお母さんが一生懸命御馳走を拵へるのを見ておりました。

「母さん、そんなに御馳走を拵へて如何なさるの。」

「お父様の御辨當ですよ。」

「だって、お父様の御辨當は、いつもそんな御馳走は無いぢやありませんか。」

「今日はね、一番むづかしい煙突が出来上るので、その御祝ひのつもりなんだよ。」

「あら、工場の煙突が出来上るの。」

と、娘はうれしさに笑ひました、姉娘は十四で高等女学校の一年生、妹は小学校の三年生で、今年十歳になりました、二人とも大層賢い子供でした。

やがて二人の娘は、學校へ出て行きました、あとには母様が一人で、今日の仕事が旨く出来れば好いなど、思ひながら、針仕事をしてゐました、丁度午後の三時頃でした、妹娘は慌だしく飛んで來ました、顔色は眞蒼になつてゐます、

「まあ、如何したのだね。」



と、母さんがびつくりして訊くと、妹娘は息をはづませながら、

「お母さん大變ですよ。」

「何が大變なの。」

「あのね、御父様が煙突の上から降りられないんだつてみんなで大さわぎしてゐるのよ。」

「まあ如何したつ言ふのだらう、一体まあ如何したのだらう。」

「あの、綱を持つて上るのを忘れたんですつて。」

「そりや大變だ。」

と、母さんと娘は、すぐに飛び出して工場へ行きました、

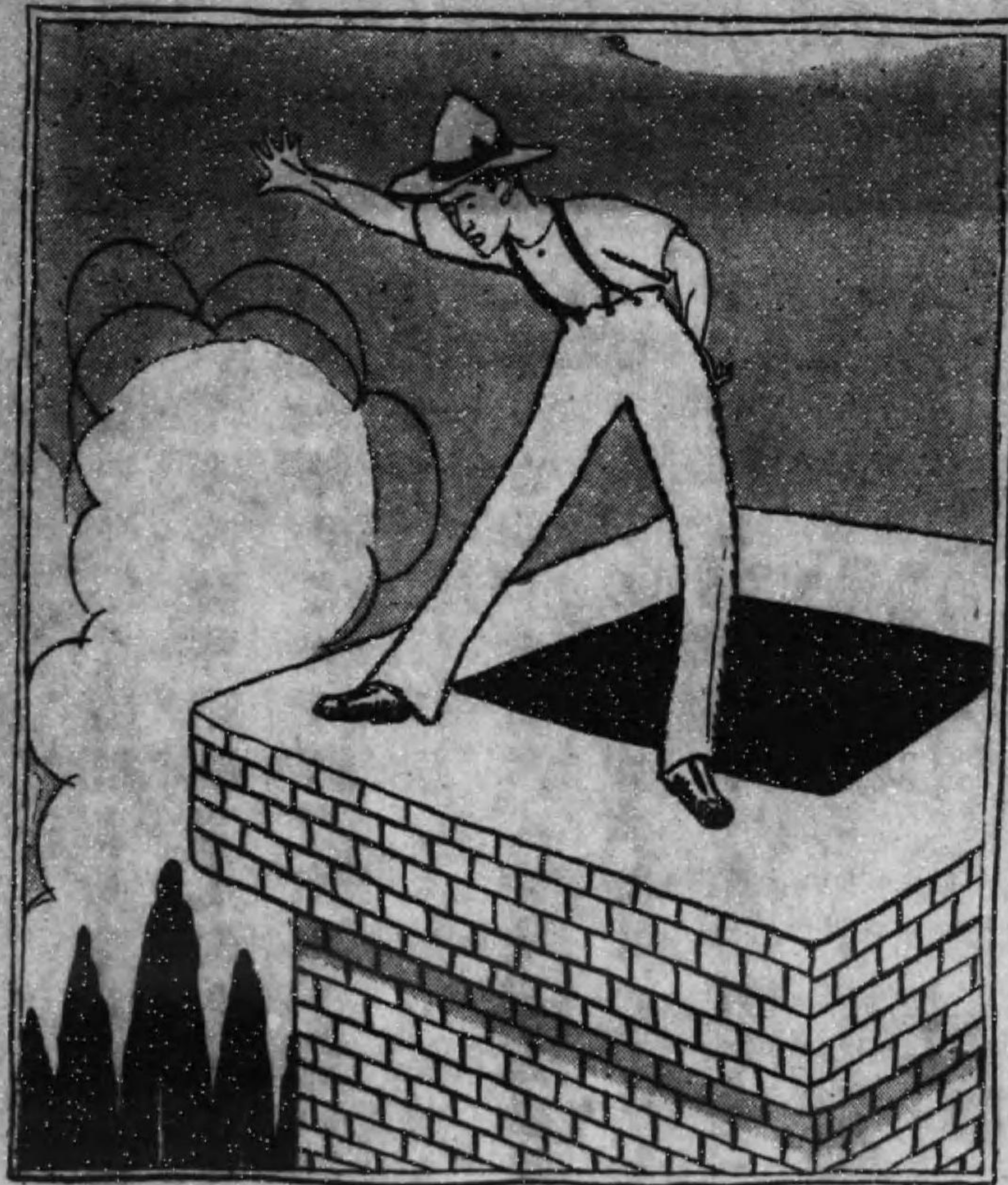
工場には、人が黒山のやうに集つてゐました、口々に大きな聲で騒いでるのですが、どうすることも出来ないのです、母さんは狂氣のやうになつて群集を押しつけ、工場の上に高く立つてゐる煙突を見上げると、お父さんが煙突の頂上に立つてゐるのが見えます。

「誰か助けてやつて下さい。」

と、聲を限りに叫びますけれども、誰も手の出しやうはありません、姉娘は學校の歸途にこの事を訊きました







高い煙突  
取りまいて  
泣くな騒ぐな  
慌てるな  
梯子やらうか  
縄やろか  
慌てず騒がず  
降といで

童 話  
少女の機轉

正男作



少女の機轉

大變驚いて駈けつきました、此の姉は平常から機轉が利いてゐる評判の娘でしたから、丁度今日學校で習つて来た靴下のことを思ひ出し、急いで工場へ飛んで來ました。

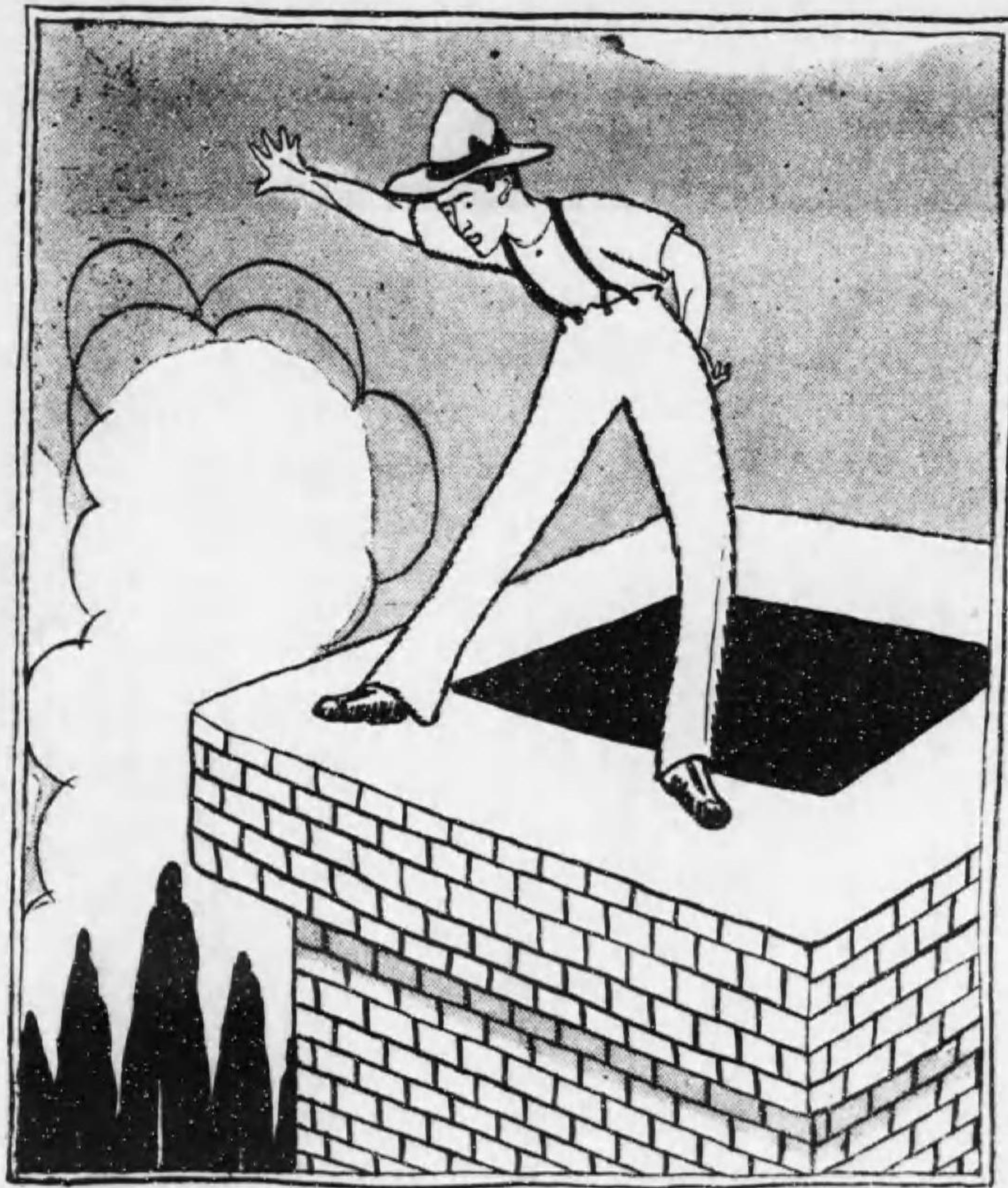
『あ、お前、お父さんが大變なのよ。』

『姉さん、お父様が大變よ。』

と、母と妹は兩方から取りすがつて泣くのです、姉は落ちついて、

『大丈夫よ、安心していらしやい、姉さんがいゝことを考へたのだから。』





高い煙突  
取りまいて  
泣くな騒ぐな  
慌てるな  
梯子やらうか  
縄やろか  
慌てず騒がず  
降といで

童 謠  
少女の機轉

正男作



少女の機轉

大變驚いて駈けつきました、此の姉は平常から機轉が利いてゐる評判の娘でしたから、丁度今日學校で習つて来た靴下のことを思ひ出し、急いで工場へ飛んで來ました。

『あ、お前、お父さんが大變なのよ。』

『姉さん、お父様が大變よ。』

と、母と妹は兩方から取りすがつて泣くのです、姉は落ちついて、

『大丈夫よ、安心していらしやい、姉さんがいゝことを考へたのだから。』





「何、どうするの？姉さん。」

「見てらつしやいよ。」

と、烟突の上を見上げて

「お父さんく、あなたの穿いてらつしやる靴下がある

でせう、その靴下の毛糸を解いて下へ下げて下さい。」

と言ひました、

見物は、この娘は何を言ふのだらうと思つて見てゐま

した、お父さんは、丸で夢中で靴下の毛糸を解いて下げ

ました、姉娘はその毛糸の先に小さい綱をつけました。

「お父さん、この毛糸をたぐりあげて下さい。」





『よし。』

と、お父さんは毛糸を引きあげました、綱が手に届いた頃、姉嬢は細い綱に、こんどは太い綱を結びつけました。

『お父さん、これを手繰あげて、その綱にすがつて下りて来て頂戴。』

と言ひました。

さては左様いふつもりであつたかと、見物はみんな目を丸くして感心してゐました。

『お前、本當に有りがたう。』



ご、母さんは涙ながら、姉嬢の手を取つて感謝しました、妹嬢は、

『姉さんはゑらいのね。』

と言ひました、姉嬢は黙つて微笑してゐました、

太い綱が上へ届くと、お父さんはその綱を烟突に引かけて、それに傳はつて、するくくと降りて來ました、みんなが大ないきをほつと吐くと同時に、雷の鳴るやうな拍手の音が起りました、見物は口々に姉嬢を褒めたゝへてゐます、



お父さんは降りて来たが、感極つて聲も出ませんでした。涙と共に姉娘を抱きあげるやうにしてキツスしました。母さんも、妹も飛んで来て嬉し泣きの涙をこぼしました。

その晩、頭の家では弟子や友達を招んでお祝ひをしました。

### 七 幸福の日。

町からずつと離れた村に、母子三人のものが住んでゐました。お父さんは早く亡なつて、二人の子供はお母さん



んに育てられてゐました。兄を櫻男、妹を百合子と言ひました。

ある日のこと、お母さんが日當りの裏口でお針をしてゐますと、見すばらしい老人の女が、跣で、杖をついて苦しさうにしながら通りました。お母さんは可哀想に思つて、

『お婆さんく、大變御疲れのやうですが、少し休んで行きませんか。』

と言つてお婆さん呼びよせ、二人の子供に座蒲團を持って來させやうとしました。百合子は女のくせにブツ







く口叱言を言ひながら返事もしないでゐましたが、櫻男は、根が柔しい性質ですから、急いで駈けて行つて座蒲團を持つて来て、乞食の婆さんに敷かせました。

「母さんつたら厭アね、あんな乞食の婆さんを呼び込んで……。」

と、百合子は言ひました。

「そんな事を言ふもんぢや無いよ、可哀想なお婆さんぢや無いか。」

「だつて……。」

と、まだブツブツ言つてます。



「お婆さん、何か飲むものをあげませうか。」

と、お母さんは老女に言ひました。

「有り難う御座います、私はお腹が空いてますから。」

「さう、それぢや何か食べ物をおあげませう、然し有り合せのものですよ。」

と、そこへ有り合せの御飯を持つて来させました、お母さんは、

「百合や、お前の桃を此のお婆さんにあげたら如何だね。」

「わたし、あの乞食婆さんにやらうと思つて、桃の手入





をしたんではないわ。』

と、百合子はブツ／＼言ひながら、然し、それでも持つて来ない譯には行きません、不平に思ひながら持つて来ました、お母さんはこんどは兄の櫻男に、

『お前も何か此の御婆さんに御馳走するものはないかね。』

『さうですね、葡萄はまだ早いし、苺はもう無いし、卵でも持つて来ませう。』

と、鶏の小屋から、生たての卵をもつて来ました、するご、如何したことでせう、汚ない老人の乞食婆さんは



何時の間にか美しくしい立派な貴夫人になつてゐました、そこで貴夫人は、

『どうもいろいろ有り難う、この御禮には、兄さんは田舎のお百姓に、妹さんは女王様にしてあげませう。』

と、言つて、杖をもつて地面を叩きますと、目の前に立派な廣々とした畑が出来ました、家も立派になりました、畑の隅には作小屋も出来てゐました、羊小屋には羊が二三十、牛小屋には十匹ばかりの牛が入つてゐました、庭には鶏だの鳩だのがゐました、花園には綺麗な花が澤山咲いてゐました。





ひつくりして見てゐるうちに、貴夫人は姿をかくしました、これは神様が斯うして櫻男の親切に教いて下さつたのでした、百合子は兄の家が立派になつたので驚いてゐましたが、自分も女王になれると云ふので、兄の幸福を羨しいとも思ひませんでした。

その時、丁度人の通り足音がそろそろ聞えました、この國の王様が、狩の歸途に通りかゝつたのです、門のそばに立つてゐる百合子の美しい姿を見るに、女王にすると言つて御殿へつれて行きました。

女王になつた百合子は、御殿へ來ると、もう嬉しくつ



て仕方がありませんでした、初めての三月ばかりは着物だの、舞踊だの、芝居だのに氣をとられて、他のことは考へてゐる間もありませんでした、然し間もなくそれに馴れて仕舞ふと、面白くも何ともなくなりました、宮中の女官たちは、目の前では大層叮嚀にしますが、本當は何とも思つてゐません。

『何てまあ高慢なんでせう、田舎娘のくせに威張つてるのね』

などと言ひます、さうかと思つと、少し叮嚀に口を訊くと、



『田舎娘つて仕方がないわね、ちつとも女王様の威光がないぢやありませんか。』

と言ふのです。

いろ／＼のことが、面白くありませんでした、胸の中の苦しみを語り合ひ慰さめ合ふ友人もなし、女王様として窮屈にしてゐるのも、面白くはありません、ある日餘りの話らなさに、

『あゝ、神様は、妾に女王と云ふ悲しいものを下すつた幸福と云ふことは、決して立派な御殿にあるのではない、却つて見かけの悪い田舎の家にあるものかも知れな



い。』

ご、思はず知らずつぶやきますご、そこへ前の貴夫人がひよつくり出て來ました。

『お前を女王にしたのは、何も良いこと、幸福を與へやうと思つたのでは無いのだよ、心持よく母さんの云ふことを訊かない、人に思ひやりのない心を罰したのだよ、幸福を得やうとするには、兄さんのやうに親切でなくつちやならないよ。』

『神様、あなたの仰有ることはよく分りました、私は實に悪う御座いました。』







「解ればそれでよい。」

「どうか私を、この不幸な御殿から外へ出して下さいまし、もとの幸福な百姓家へかへして下さいまし。」

「よろしい、お前の望みの通りにしてあげやう。」

と、杖で静かに百合子の肩を撫でたかと思ふと、百合子は何時の間にか、村はづれのもとの家の前へ来てゐました。

「おゝ、百合子歸つたかい」

と、母さんは喜んで迎へてくれました。

その後、百合子は兄の世話になつて田舎住居をしてゐ



ました。美しい着物も着ず、家臣も女官もあませんでした。芝居にも、舞踏にも行きませんでした。然し、心は嬉しく楽しく、いつも春の日のやうに輝やいてゐました。人の本當の幸福は、めいゝの心の持ちやうにあるのです。

### 八 善悪二人兄弟

三吉と紫朗と云ふ兄弟がありました。母さんはどう云ふものか、弟の紫朗をばかり可愛がつて、兄の三吉を酷く扱ひ、弟にはうまい物を食べさせ、美しい衣服を着

善悪二人兄弟





善悪二人兄弟

せて大切にしておりましたが、兄の三吉には不味いものばかりを食べさせ、悪い衣服を着せて牛馬のやうに追いつかつておりました。

所が三吉は、至つて氣質の柔しい子で、母さんにどんなに酷く追ひ使はれても厭な顔もせず、何事もはいくよく云ふことを訊いておりました、此の頃では弟の紫朗までが兄を兄とも思はず丸で下男か下女のやうに叱つたり使つたりするのですが、三吉は少しも逆はないでちつと辛抱しておりました、この三吉は、母さんには継子に當るのです。



畫 話

善悪二人兄弟

正男作

善悪しさに  
出て見れば  
雪はチラ／＼  
降つてゐる  
赤い梅の  
なる事は  
どこのお國に  
あるのやら





善悪二人兄弟

せて大切にしておりましたが、兄の三吉には不味いものばかりを食べさせ、悪い衣服を着せて牛馬のやうに追いつかつておりました。

所が三吉は、至つて氣質の柔しい子で、母さんにどんなに酷く追ひ使はれても厭な顔もせず、何事もはいくよく云ふことを訊いておりました、此の頃では弟の紫朗までが兄を兄とも思はず丸で下男か下女のやうに叱つたり使つたりするのですが、三吉は少しも逆はないでちつと辛抱しておりました、この三吉は、母さんには繼子に當るのです。

童 話

善悪二人兄弟

正男作

梅ほしさに  
出て見れば  
雪はチラ／＼  
降つてゐる  
赤い梅の  
なる草は  
どこのお園に  
あるのやら





丁度十二月の中頃のことでした、昨夜から降り出した大雪は一晩のうちにメツキリ積つて、今朝はもう一尺からの深さになつてゐます、朝飯を済して仕舞ふと、三吉は例の通り臺所で茶椀や皿小鉢を洗つてゐますと、奥の間で炬燵に當つてゐた紫朗は、

「阿母さん、僕母が食べたいなア」

と言ひました、時は十二月、冬の真中でしから母のあの譯はありません、そんな無理を言つてはならぬと叱るべきなのに、紫朗を嘗めるやうに可愛がつてゐる母さんは、



「さうだね、探したら何所かにあるだらうから、三吉に探させやう」

と言つて三吉を呼びました、

「母さん何か用ですか」

「用があるから呼んだのぢや無いかね、何を愚圖々々してゐるんだね。」

「はい。」

「はいぢやないよ、紫朗がね、苺が食べたいと云ふのだから、お前探して来てをくれ。」

「だつて今時分苺はありませんもの。」



「そんなことはお前に訊かなくも知つてるよ、澤山あるものなら、何も探して来いとは言はないよ、無いからこそ探して来いと言ふのぢやないかね、早く探しておいで。」と、追ひ立てるやうに言ふので、三吉も仕方がなく家を出ました、然し、この雪の降る寒中に苺のある譯はありません、こいつて苺をもつて歸らぬと、またどんなに叱られるかも知れないと、三吉は雪の中で考へてゐました。

すると、向ふから一人の老爺さんが杖にすがつてやつて来ましたが、見れば可哀想にこの雪の降るのに傘もさ



さず、單衣ひとへものをきてぶるく、慄おそえてゐるのです。

『あゝ、可哀あはれな人だ。』

と、三吉さきちは自分のことも忘れて、着てゐた羽織はなむかひを脱いで、

『お爺さん、これをあげるから早く着なさい。』

『はい、どうも有り難ありがたう御座ごぞいます、誰方どなたか存ぞんじま  
せんが、おかげ様さまで暖あたたかくなります。』

『それから、少しだけれどお金かねをあげるから、町まちへ行つ  
て何か買かつて食たべなさい。』

と言いひながら、自分じぶんの持つてゐた僅わずかかばかりのお小遣こづかい



をお爺おやさんにやりました、お爺おやさんは思おもひがけない三吉さきち  
の親切しんせつに、ぼろく、涙なみだを流ながして喜よろこび、いく度たびもくも頭あたま  
を下さげてお辭儀じぎをしましたが、

『おかげ様さまで助たすかりました、私わたしはこれで五六日ごにち御飯ごはんを食  
べないので、もう倒たふれて死しんでしまはふかと思おもつた所ところで  
すが、おかげでやつと元氣げんきがでました、然しかし見みれば貴方あなた  
は、何か心配しんぱいさうな顔かほを爲なつてらつしやるが、どういふ  
ここですか、お話をはなしなすつて下くださいませんか。』

『心配しんぱいといつて別べつにないが、實じつは僕ぼく、苒いちごを探さがしに來たの  
です。』





「苺？ そりや奇怪いすね今時分。」  
「弟の紫朗が食べたいと云ふので、母さんが取つ来いと云ふの！」

と言ひながら、三吉は何故か悲しくなつてほろりと涙を流しました、お爺さんは慰さめ顔に、

「そんな事なら御心配なさるな、私がいいことを教へてあげませう。」

と、いつて持つてゐた杖で、バツと雪の上を叩いて

「三吉、背後を御覽。」

「えッ？」



と言つて三吉が脊後を振りかへつて見ると、如何でせう、四邊の雪はみんな解けてしまつた、木には青々とした葉が出来、土は緑の草が生えてゐました、びつくりして四方を見廻すと、そこら一面苺が珊瑚のやうに赤く熟してゐるのが見えました、

「あゝ、苺が生つた。」

「この苺をお前さんにやるから、取つて行きなさい。」

「御爺さん有り難う。」

用意の籠に苺を摘みこつて一ぱい入れて、歸らうと思つて立ち上ると、お爺さんの姿は見えません、四方はや







つばり冬の景色、雪がちら／＼降つてゐます、お爺さんにやつた羽織もここにありますが、籠の中には苺が一ぱいあります、さては神様が此の苺を授けて下さつたのだらうと、急いで羽織を着て、喜び勇んで家へ歸つて、苺を母さんに渡しました、母さんは少し驚いて、

「おや／＼まあ、よくそんな新しい苺があつたね、一体何所で見つけたの。」

「あの公園の中で。」

「なに公園だつてさうかね。まだ澤山あるだらう」

「もう有りません。」



「嘘いつてるよ、もう無いと言つてあとで自分一人で取りに行かうと思ふのだらう、本當に三吉は不可い兒だよ。」

「嘘ぢやありません。」

「いゝよ、今見て来るから、紫朗や、その苺を食べてしまつたら母さんご一所に公園へ行つて見やう、きつとまだ苺が澤山あるに違ひないからね。三吉に頼むと途中で、のを食べられて仕舞ふからね。」

「なあ、三ちゃんはずるいからね、今度は僕取つて来らな。」



「さあ、早く行かうよ、人に取られてしまふと詰らないから。」

「あ、今行くよ。」

さ、いちごを頬ばりながら、三吉のとめるのも訊かないで紫朗はお母さんご一所に公園へ行きました。

然し、何時まで経つても二人は歸つて来ませんでした。た、一時間経ても、二時間経つても歸つて来ませんでした、

「どうしたのだらう、母さんや紫朗は」

と、三吉は心配しながら、二人を探しに出かけまし



た、

公園の入り口へ行つて見ますと、何だか黒いものが雪の中に埋まつてゐます、見ると、それがお母さんと紫朗でした神様の罰で雪の下になつて凍死をしてしまつたのです。

### 九 雷公と醫者

昔、京の都に藪井竹庵と云ふ若い醫者がありました、もとより藪井と云ふ位ですから餘り上手ではありません、ちつとも流行りませんから、仕方がありません、江戸と

雷公と醫者







云ふところは、大分賑やかさうだし、學者も大變あるから、一ご修業して来やうと思つて出かけて来ました。

泊を重ねて廣い、野原へ来ました、そこは有名な武藏野でした、ところが雷の鳴る音がして急に夕立がして来ました、とうとう雷が落ちたので藪井先生びつくりしてしまひました、すると、

『貴様は誰だ。』

と、太鼓を脊負つた繪に書いてあるやうな雷公が大きな聲で怒鳴りつけました、

『はい、私は都から参つた醫者で御ざいます。』



『何、醫者だ、うれは丁度幸ひだ、なれば今天から落ちて腰を打つて痛くて仕方がない、ひとつ療治して貰はふ。』

『私は人間の療治はいたしますが、まだ雷様の療治をしたことは御ざいません。』

『人間だつて雷だつて同じことだ、愚圖々々言ふと張り殺すぞ、早く療治しろ。』

と、大變な見幕なので藪井先生も仕方がありません、脈をとりはじめました、

『雷様、あなたは持病がありますな。』



「フフン、お前は上手だ、いかにもおれは持病がある、臍の食いたいと云ふ持病がな。」

「それが不可せんのですよ、その持病があるばつかりに下界へなぞ落ちるのですよ、これから氣をつけなさい。」

「よし／＼氣をつけるから腰の痛をなほしてくれ、何か薬はないか。」

「旅のことで薬は持ち合せませんが、針を持つてますから、打つて見ませう。」

と、針を打つと、雷公は、恐ろしい顔にほろ／＼涙をこぼしてゐますが、痛いと言つたら人間に笑はれるだら



うと思ふから、ちつと我慢してゐます、針を抜くと腰が立つやうになりました、

「やれ／＼有り難いぞ、お前は實に名醫だ、それではおれは天へ歸る。」

「もし、雷様薬禮を置いて行つて下さい。」

「薬禮かい、いや是はどうも困つたな、おれは持合せの金がない。」

「ないと言つてもそれは御無理です。」







卵子の行方

『そんなことを爲つちや困ります。』  
 『はて、それではお前が名醫になつて天下に名を轟かすやうに祝つてやらう、それでよからう左様なら。』  
 と、言つたが早いか、びか／＼、ごろ／＼とばかり天へ上つてしまひました、此の藪井先生は醫者は上手かどうか分りませんが、どんなものでも藪井竹庵と云ふ名前を知らないものはありません、これは此の時の雷公の約束だつたのです

一〇 卵の行方



童話

卵子の行方

正男作

ノソ／＼出て来た  
 青大将  
 ベロ／＼呑んだ  
 木の卵子  
 御馳走様と  
 済した顔で  
 草葉の蔭へ  
 ノソ／＼と





卵子の行方

『そんなことを爲つちや困ります。』  
 『はて、うれではお前が名醫になつて天下に名を轟かすやうに祝つてやらう、それでよからう左様なら。』  
 と、言つたが早い、びか／＼、ごろ／＼とばかり天へ上つてしまひました。此の藪井先生は醫者は上手かどうか分かりませんが、どんなものでも藪井竹庵と云ふ名前を知らないものはありません、これは此の時の雷公の約束だつたのです。

一〇 卵子の行方



童謡

卵子の行方

正男作

ノソ／＼出て来た  
 青大將  
 ベロ／＼呑んだ  
 木の卵子  
 御馳走様と  
 済した顔で  
 草葉の蔭へ  
 ノソ／＼と





東京の山の手の、一町も行けばすぐ田舎の道に續く町外れに、駄菓子やラムネを賣つてる茶店がありました。新吉はお婆さんと二人でこの店に住んでゐました。新吉は中々學問の出来る子供でした、それで操行がよくて、試験のたびに御褒美を貰ふのでお婆さんは、自分のことのやうに喜んでお客様に話して訊かせます、丁度去年の夏のことでした、學校が暑中休暇になつたので、新吉は、家にゐて店番をしてゐました、それはお婆さんが、た菓子の仕入に町へ行つた留守でした、晝すぎになつてお婆さんが歸つて來ました。



「新吉、よく留守番をしてゐてくれたね、これはお土産だよ。」

と、言つてお婆さんは買つて来たお伽文庫を新吉にやりました、新吉は喜んで奥へ入り、その本を讀んでゐると、お婆さんが大きな聲で、

「新吉や〜、ちよつとお入來。」

「何か用ですか。」

「新吉や、今日は鶏卵を幾個賣つたね。」

「今日は卵はちつとも賣りませんよ。」

「賣らない、それは不思議だね、今朝出かけつごきには



十個置いて行つたのだが、それが今見ると六つしかないのだよ。」

「へエ、でも僕、お菓子は賣つたけれども、卵は賣らなかつたよ。」

「おかしいことがあるものだね、ちや泥棒にでも盗られたのかね。」

「さうだね、僕、よく氣をつけて店番をしてゐたのだから、泥棒なんか入る譯はないけれどもね。」

「不思議だね。」

と言ひ合ひましたが、その日は其の儘濟みしました、さ





てその翌日の夕方になつて調べて見ますと、三つばかり  
賣つた外に、また鶏卵が二つ足りないのです。

「新吉や、今日も卵が二つ足りないよ。」

「どうも不思議だねお婆さん。」

「本當に奇怪しいよ。」

「ひさりでに落ちたのならそこらに落ちてゐなくつち成  
らないし、泥棒が盗つて行つた風もないし、どうしたの  
だらう。」

それから、毎日々々、卵が二つ位づゝ紛失ります、ど  
うも不思議でなりません、終ひにはお婆さんは新吉が盗



つて食べるのではないかと疑ふやうになりました、新吉  
はそれが口惜しくつてなりません、どうかして此の卵を  
盗つた者を見つけて自分の證明を立てなければならぬ  
と思ひました、よく氣をつけて見てゐると、どうやら蛇  
の仕業のやうです。

「お婆さん、卵泥棒が分つたよ。」

「何、泥棒が分つた？それや誰だい。」

「あのね、卵を盗つて行くのは蛇だよ、どうも蛇らしい  
よ。」

「何を言つてるのだよ、蛇が卵など盗つて如何するもの





だ。』

と、お婆さんは本當にしません。

新吉はどうかして蛇を退治してやらうと、算術の問題を考へるやうにそろ／＼工夫しましたが、やがて面白い方法を考へました、それは木を卵位の大きさに拵へて、それに白墨の粉を塗つて、ちよつと見ると本當の卵と思はれるやうにして、それを五個ばかり卵の箱へ入れてをきました、夕方になつて見ると、木の玉が二つ見えません、これはきつと蛇が木の玉を呑んで苦しんでゐるに違ひないと、大急ぎで裏庭をさがしますと垣根のところに



大きな青大將がのろ／＼這つてゐます。

「お婆さん／＼、ちよつと来て御覽なさい、卵泥棒をつかまへたから。」

とお婆さんと呼んで來ました。

「どれ／＼、どこに卵泥棒が………どれが卵泥棒だい。」

「あの蛇ですよ。」

「人を馬鹿にしてるよ、蛇が卵なんか呑んで如何するね。」

「いゝから見て御いでなさいよ、腹があんなにふくれてるでせう、あれは僕の拵へた木の王を卵だと思つて呑ん





だからですよ、卵なら腹へ入つて消化るけれども、木の玉は消化ないから苦しがつてゐるのだよ。』

『へエ、左様かね。』

と見てゐると、蛇は垣根から桃の木に這ひ上つて、四尺ばかりの枝から下へ落ちました、卵なら潰れてしまひますけれども、木の玉だから中々潰れません、蛇はいく度もく／＼左様やつて腹の中の卵をつぶさうとしましたがそれは無駄なことでした、とう／＼苦しみながら死んでしまひました。

新吉は死んだ蛇を溝の中へ捨て、しまひました。



『もうこれで卵泥棒も出ませんよ。』

と言ひますと、お婆さんもやう／＼仔細がわかつて、新吉をちよつとの間でも疑つたのを後悔し、新吉の智慧のあるのを感じしました、近所の人は、お婆さんの自慢の種がまた一つ増えたと言つてゐました。

## 一一 お化の頓死

幸吉に「お芳」と云ふ正直な爺さん婆さんがありました、子供に稼業をけつづつて自分たちは村はづれに隠居して何不自由なく暮してゐましたが、世の中は儘にならぬもの

お化の頓死





で村中で一番善人の幸吉の家にも、病氣と云ふものが舞ひ込んで来て、お芳婆さんを苦しめました、醫者に診て貰ふと、これは中風と云ふ病氣で、ごとも丈夫にはなれまいと云ふことでした、そこで當人も諦らめて子供や孫にいろく遺言をしましたが、とりわけ爺さんの幸吉には、

『私は死んでも何不足もないけれども、若し不足だと思ふことがあつたら幽霊になつて来て頼みますから、どうか叶へてやつて下さい。』

と、何邊も繰りかへして頼みました、



その内に、お芳婆さんは壽命がなかつたと見えてごうく死亡つてしまひました、あとにのこつた幸吉は大層力を落しましたが仕方ありません、子供たちと共に立派にお葬式を出してからは、幸吉はこの村はづれの隠居屋に一人であつて、亡なつた婆さんの後世を願ふため、ひまさへあればお念佛を唱へてゐました。

ところが、此の村に勘六に、お黒と云ふ夫婦の者がありました、これは幸吉の親類になるのですが、心の悪い奴ですから、村中一番の金持だつたのですが、いろく悪いことをして家のお金をみんな賣り拂つてしまつて、





今では貧乏くらしをしてゐるのでした。

『たくろや、お芳婆さんが死んだと言ふが、その時、何か頼みがあつたら幽霊になつて出るといつて遺言したさうだよ。』

『へエ、左様ですかね、ずい分執念深い婆さんだね。』

『そこで、ひとつ旨い金儲を考へたのだがね、お前がお芳婆さんの幽霊になつて、ちつとばかりお金を捲きあげやうぢやないか。』

『それは面白いね。』

と、根が悪い者揃ひ、いろくくと幽霊になつて化て出



る工夫を考へてゐました

ある晩のことでした、幸吉はいつもの通り佛壇へお燈明をつけて、お念佛を唱へてゐましたが、そのうちに念佛をやめ、燈明を消して寝ました、すると、真夜中頃、『お爺さん、』

と、起す者があります。

幸吉爺さんは、びつくりして目を覺まして見ると、先の亡つたお芳婆さんの幽霊が、三間ばかり離れた所にあるのです、白經堆子を着て、白い帯を前結びにダラリ下げ、白髪交りの髪を振り乱して立つてゐます、前の方に





は鬼火が燃えてゐますから、幸吉はびつくりして仕舞ひました。

『婆さんく、お前どうしたのだい。』

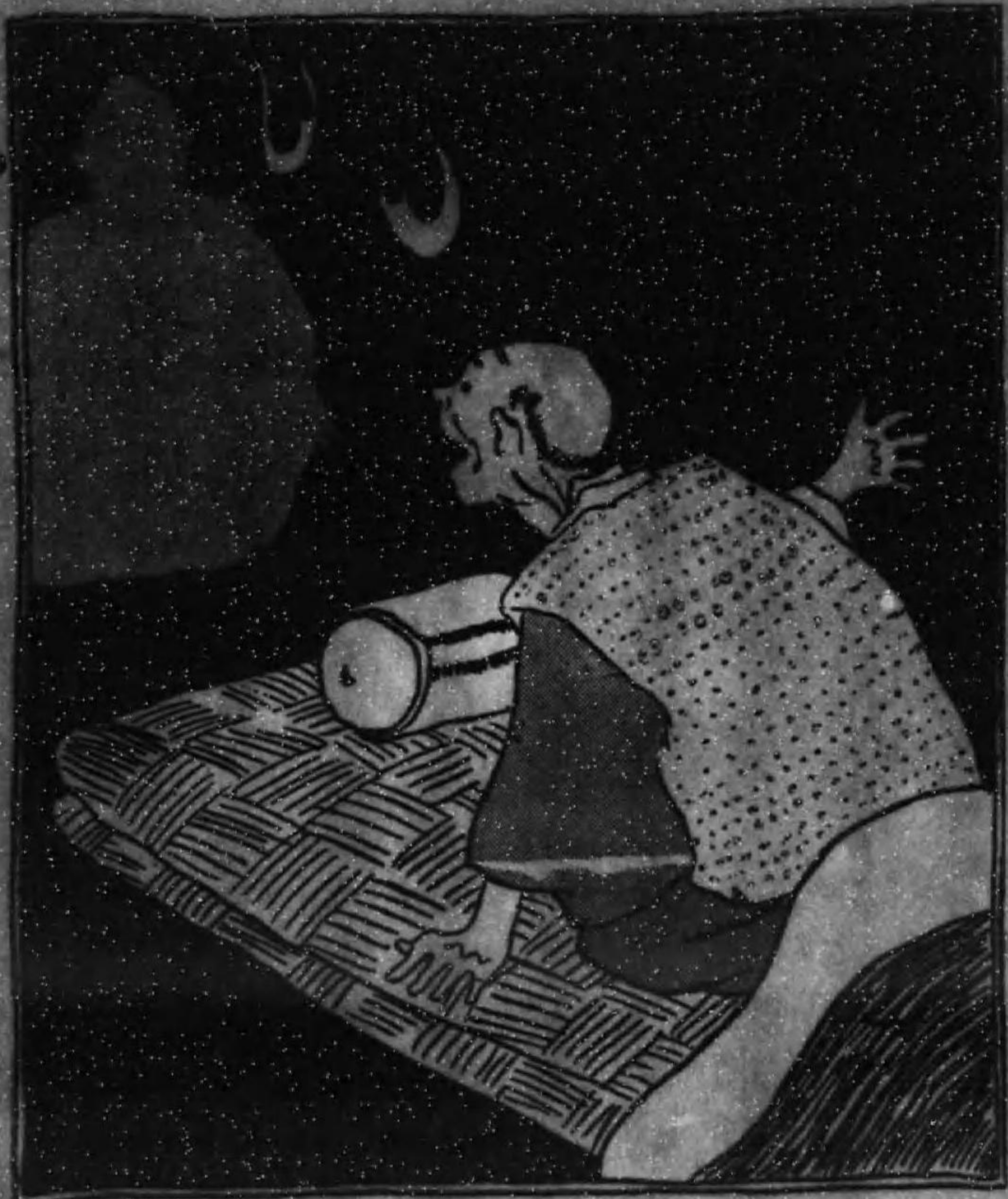
『私はまだ極樂へ行けないで迷つてます。』

『何だ迷つてゐる、大寺の和尚様からあれ程お經をあげて貰つたからもう極樂へ行つてゐるだらうと思つたのに、何と云ふことだ。』

『和尚様からも御經をあげて頂き、お爺さんからもお念佛を唱へて貰ひましたから、立派に極樂の入口まで行きました。』  
『持つて行くものとは何だい。』  
『それはお金ですよ、どうかお爺さん、お前さんが死ぬときは、子供や孫にお金を澤山貰つて行かれますから、私にはお爺さんからお金をくれて下さい。』  
とお芳婆さんの幽霊はさも悲しさに言ひます。  
なる程お芳婆さんの死ぬときに、六道銭だけは棺の中へ入れてやりましたが、それだけでは何となく物足りないやうな気がして、他の者にも相談した位ですから、今婆さんが幽霊になつて來たのもつとものことだと思ひ







幽霊上手な  
婆さんが  
お金儲けに  
化けて出て  
屋根からコロコロ  
ころがって  
とうとう本當に  
死んちやつた

お化の頓死

童話

正男作



お化の頓死

ましたものですから、

「婆さん、お前がそのやうに言ふなら、幸ひ此所に百兩の金があるから、これでも持つて行かつしやれ。」

と、佛壇の曳出から、財布を出してそれをお芳婆さんに渡しました、婆さんは喜んで、

「お爺さんどうも有り難う、これで私も無事に極樂へ行けます。」

と、懐中へ入れました、

幸吉はあけても暮れても忘れたことの無い婆さんのことですから、なつかしく思つて、





お化の頓死

ましたものですから、  
 『婆さん、お前がそのやうに言ふなら、幸ひ此所に百兩の金があるから、これでも持つて行かつしやれ。』  
 と、佛壇の曳出から、財布を出してそれをお芳婆さんに渡しました、婆さんは喜んで、  
 『お爺さんどうも有り難う、これで私も無事に極樂へ行けます。』  
 と、懐中へ入れました、  
 幸吉はあけても暮れても忘れたことの無い婆さんのことですから、なつかしく思つて、

童 謡

お化の頓死

正男作

幽霊上手な  
 婆さんが  
 お金儲けに  
 化けて出て  
 屋根からコロコロがつて  
 とうとう本當に  
 死んぢやつた





「婆さんや、久しぶりでちと極樂地獄の話でもして下され。」

「いえ、それ所ぢやありません、道中錢に困つた位だから、まだ極樂どころか、地獄へも行つたことは無いんです、今晚御金を頂いたから是から極樂へ行つて来てゆつくりお話をいたしませう、やれ、うれしや。」

と、言ひますと、ばつと鬼火が消えてお芳婆さんの姿は、すうつと勝手元の引き窓の方へ上つて行きます、何にしても此の儘別れるのは残念だと思つて、

「婆さん、まつて下され、まだ話したいことが澤山あ

お化の頓死





る。』

と、言ひながら、お芳婆さんの幽幽の、着物の裾を捕へますと、不思議やブツツリ繩の切れるやうな音がして幽霊がドサンと勝手元に落ちて、

『キヤツ。』

と言ひました。

『わツ、大變だア。』

と、幸吉はそこへ倒れてしまひました。

やがて夜があけたので、幸吉爺さんこわく起きて見ますと、如何でせう、悪たれ婆のおくろが、顔にいろく



のお化粧をしてお芳婆さんの幽霊になり、百兩の金を持つた儘勝手もこの板の間で頭を打つて死んでゐます、裏口へ出て見ますと、井戸の中には勘六爺が浮き上つて死んでゐました。

讀者諸君、これはどうしたのでせう、お分りになりませうか、これは勘六が井戸車を引き窓に仕かけて、たくろ婆さんを釣り下げて幽霊の眞似をさせて、百兩の金を取らうとしたのですが、釣り繩が切れたので、二人とも死んでしまつたのです、何と悪いことは出来ないものではないありませんか。



一二 歌よみ娘

お母さんと、娘が二人ありました、姉さんばお文、妹はた雪、どつちも可愛い娘でしたが、お文はお母さんの本當の子ですから大切にされてゐました、お雪は繼子ですから毎日々々、朝から晩まで叱られてばかりゐましたお文は美味しいものを食べてお化粧をして遊んでゐましたが、お雪は、垢のついた着物をきて不味いものを食べて働いてゐました、

雪のちら／＼降る寒い日に、お雪は足衣もはかずに、



裏の小川で菜を洗つてゐました、すると、その國の殿様がお駕籠に乗つて通りかゝりましたが、お雪を見て、

この川に

小菜ふりそゞく少女子が

丈が高けりや嫁にしやうもの

と言ふ歌を詠みました、するとお雪は、

殿様や

つじし椿を御らうじろ

背はひくけれど花は咲きます

と歌で御返事をいたしました、





殿様はお歌が大すきでした、お雪がすぐに歌で御返事を申上たのを大層よろこんで、

「お前は中々感心な娘ぢや、明日の朝迎ひに来るから待つてゐなさい。」

と言つてお歸りになりました、

お雪は菜を洗つて家へ歸りましたが、殿様のことは誰にも話しませんでした、冷たい蒲團の中に夜があけて、雪も止んで好いお天気になりました、お雪が御飯を食べながら臺所で洗物なしてゐると、昨日の殿様がお駕籠に乗つて來ました、



「入來しやいまし、ようこそ。」

と、お母さんは、殿様の御入來だと云ふので、叮嚀に挨拶をしました、娘のお文にも御化粧をさせてお茶のお給仕をさせました。

「これがお前の娘か。」

と、殿様は訊きました、

「左様で御座います。」

「わしが昨日見た娘とは少し異ふやうだが、然しもう一度歌を詠ませて見やう。」

と思つて、殿様はお盆と、お皿を母さんに持つて來さ







せて、木皿の上に鹽を少しばかり盛り、塩の上に松の葉を二つ之へ乗せて、

『さあ、これを見て歌を詠みなさい、立派によめればわしの嫁にする。』

と言ひました、お文は歌なぞよんだことはありませんから、眞赤な顔をしてもちくしてゐます、殿様は、

『さあ、早くよんで見なさい。』

こ、催促します、母さんも、歌がよめれば立派な殿様の嫁になれるのですから一生懸命です、お文を叱るやうに、



『さあ、文や、早く歌を御よみなさい。』  
こ、責め立てるのでお文も仕方がありません、赤い顔をしながら、

盆の上に雪のせて

雪の上に鹽まいて

松葉が二本立つたやい

とよみました、殿様は呆れてしまひました、何と云ふ

變な歌だらう、こんなものは歌ぢやないと思ひました、

『こんな歌は仕方がない、お嫁には出来ないからさう思つてゐる。』



と、ブン／＼怒つてしまひましたが、ふと見ると勝手の方に誰かあるやうです。

「勝手もとにもう一人娘があるやうだが、あれは何だ。」

「妹娘で御座いますが汚なくて殿様の前には出されません。」

「汚なくもよい、その娘を連れて来い。」

と、言ひました、殿様が連れて来いと仰有るのですから、厭だと云ふことは出来ません、仕方ありませんから母さんはお皿を呼びました、お皿は急いで出て来ました。



「あゝ、お前だ、成る程雪の様に白い顔だ、さ、これを見て歌を御よみ、昨日の約束のやうに御殿へつれて行つておよめさんにしてやるから。」

と、殿様が言ひました、母さんもお文も變手古を顔をして口惜しさうにお雪を見てゐました、お雪は靜に、

盆皿や

皿てふ山に雪ふりて

雪を根にして育つ松かな

と云ふ歌をよみました、殿様は大層感心しまして、

「うまい、實にお前は歌が上手だ、さ、御殿へ御入





来。』

と、お雪の手をとつて、自分と一所の駕籠に乗せて、さつさこ出かけて行きました。

お母さんもお文も、口惜しくつて、腹が立つて仕方がありませんでした。殿様の爲さることですから如何するここも出来ません、お雪は殿様の奥様になつて幸福に日を送りましたが、お母さんやお文は、だんく貧乏になつてしまひました

一三 まぐれ當り



花下長門守の家來に、洞尾福太夫と云ふ男がありました、弓術師範と言ふ立派な役目は持つてゐますが、本當は弓などはちつとも知らない、百姓上りの法羅吹きなのです、法羅を吹き當て毎日御殿へつとめてゐますが、武家の作法も知らない男ですから、如何な場合でも上下を着てキチンと座つてゐますから、大層きちやうめんな侍だと云ふ評判が立ちました、そのみならず、元來何にも知りませんからいつでも無言であるのが、大層殿様のお氣に召しました。

『福太夫は長上のものから下僚のものにまで萬事叮嚀でまぐれ當り』





はあるし、萬事に知つたかぶりをせぬから感心ぢや。』  
と、大層な御ひいきです。

今日も福太夫は例に依つて御殿へ参りましたところが  
殿様御待ちかねと言ふのですぐ御前へ伺ひました。

殿様から四方八方の話がありました、一事一物も知  
らぬ福太夫、恐れ入りました、御もつともで御座る、如  
何にも、大きに、左様などと挨拶するばかりで、自分か  
らは何ひとつ話をしやうとは思ひません、そこで殿様も  
今どは福太夫に何か話をさせやうと思ひ、

『これく福太夫、其方は何を言ふても返事はするが、



自分から嘸し出したことが無い、何か面白い嘸を知つて  
るなら話して聞かせろ。』

と言ひます、福太夫は相も變らず、

『何共恐れ入りましたが、かねて申上げます通り、何ひ  
ごつ存じません不調法もので御座いますから、此の儀ば  
かりは御ゆるしを願ひます。』

と申上げる、殿様は福太夫め、又しても逃口上を申す  
ご笑ひながら、

『こりや福太夫、其方はいつも逃口上をのみ申すが、た  
ごへば親の遺言であつても主人の尋ねに答もせず、知り







まぐれ當り

「ません存じませんで許されぬぞ、人間の一代にはいろくの經歷がめるものだ、それを話して聞かせろ。」

「どうも困ります。」

「何が困る、それは人を感じさせるやうな話はなくとも面白く何か、面白くなくも變つたことか、何かなければならぬ、それを少しも話をせぬのは、全体主人を馬鹿にするに云ふものだ。」

「馬鹿にするなど、は、中々持ちまして左様な譯は御座いません。」

「然らば話をしろ。」



童 話

まぐれあたり

正男作

お前の商賣  
何んぢやいな  
ほらを吹いたり  
嘘ついて  
まぐれあたりで  
ほめられて  
御褒美頂く  
武士よ





まぐれ當り

「まぐれ存じませんで許されぬぞ、人間の一代にはいろ／＼の經歷がめるものだ、それを話して聞かせろ。」

「どうも困ります。」

「何が困る、それは人を感じさせるやうな話はなくとも面白いことか、面白くなくも變つたことか、何かなければならぬ、それを少しも話をせぬのは、全体主人を馬鹿にするよと云ふものだ。」

「馬鹿にするなどゝは、中々持ちまして左様な譯は御座いません。」

「然らば話をしろ。」



童 謡

まぐれあたり

正男作

お前の商賣

何んぢやいな

ほらを吹いたり

嘘ついて

まぐれあたりで

ほめられて

御褒美頂く

武士よ





「左様ならば仰せに従つて申上げませう、福太夫幼少の折、實父に連れられて猪狩に参つたことが御座います。」  
「ウーン、それは勇しいことだ、一段と面白からう。」  
「拙者の生れ故郷に一つの山が御座います、その山續には、猪、狼など澤山棲んで居りますので、父は時々鐵砲をかついで参り、始終何か獲物を持つて歸りますので、私も父に強情つて連れて行つて貰ひました。」  
「それは愉快ぢや、すべて武士たるものは小供の時からその位の勇氣がなくてはならぬ、それから如何いたした。」

まぐれ雷り







まぐれ當り

「父は鐵砲を持ち、私は弓を持ち、何でも父のとらぬ前に何か射とめてやらうと思つて、内々目をくばりながら山へ参りました、其日は實によい天氣で、折しも秋のこゝとで御座いますから、木々に鳴く小鳥と空に舞ふ鳶の外何物も目當りません、その内に食事時になりましたから、親子ともは大杉の根方に腰をかけて晝食を食べて居りますよ、父は其邊を見て居りましたが、私に向ひまして、

(之を見なさい、此所にある獸の毛のかたまりはみんな狼の糞である、何でも此の邊に狼があるに違ひ無い)



と申しますから、私も驚いて手早く食事をかたづけ、四方に氣をつけて居りますと、遠いやうな近いやうな、右か左か分りません、大きな犬でも唸るやうな聲がします、父はなうり聲を訊き出すと、

(狼が自分の住居へ人間の來たのを怒つて出て來るのだから、向ふの木の根を見てゐる、若し此方へ來たときはおれが撃つてしまふから)

と申します、弓矢を取りあげて立ち上ると、二十間ばかり向ふの木の根に大きな狼が出ました。

『ウーン、狼が出たか。』

まぐれ當り



と、殿様は膝を乗り出して聞いてゐます、近習の武士たちも熱心に耳を傾けて、福太夫の話に聞き惚れてゐます。

「は、狼が出ました、その眼の光は火のやうで、うの口は耳まで裂けてゐます、その内に父は狼に狙を定めて撃ち殺さうとして居りますと、狼はしばらく父を睨んでゐましたが、ウオーツと一聲呼ぶや否や、父の胸口元に……。」

「飛びついたか、ウーン。」

花下長門守様はうなり出した。



「いえ、飛び付かうといたしますと、父はすかさずズドンと一發打ちますと、急所に當つたものと見え、再びウオーツとうなりながら其儘倒れました。」

「やれく、よかつた。」

「すると、又出ました。」

「何、又出たか。」

「今度は雌で御座います、前にも劣らぬ大きな狼で、父の背後から飛びつきました、父は今鐵砲を打ち放しましたので、彈丸をこめる手間がありません、腰刀をぬいて戦つてゐましたが、その狼の飛びまわる右様は實に飛鳥







まぐれ雷り

の如くです、そこで、私は、弓に矢を番ひまして、父と戦つてゐる狼の目を狙つて矢をひようと放しました。』

『ウーン、矢を射て放したか、それで……』

『矢は誤たず狼の目を貫ぬきました、急所の痛手に狼はそこへ倒れ、父の生命も助かりました、めつたに私を褒めたここのない父も、この時ばかりは私の弓術の妙を褒めてくれました。』

『其方は目を覗つて射たと申すが、毎度目ばかりねらふのか。』

『御意で御座います、其後も度々猪狩狼狩はいたしまし



たが、無暗に獲物に傷をつけても手際が悪う御座いましたから、いつも眼ばかり狙つて射ることにして居ります。』

『嘘を申せ、いつも左様注文通りに行くものではない。』

『如何いたしまして、譯は御座いません、注文通りに行かない位なら弓の上手などは申しませぬ。』

殿様もはじめのうちは、それ程にも思ひませんでした、が餘り福太夫が天狗な話をするので、よしそれでは一つためしてやらうと思召して、

『然らば福太夫、城下から三里ばかり山奥に猪狼のゐるまぐれ雷り』



山がある、明日はその山へ其方 召しつれて猪狩に参る。

「ウ、へ。」

とばかり、福太夫目をバツクリさせてゐます、まさか今のは冗談ですとも言ひかねて、もじくしてゐました。

「其方が猪なり兎なり見つけて首尾よく目を射たら褒美として百石の加増を申しつける、もし射損じたら知行を召しはなすがよろしいか。」

と言ふので、斯うなつちや恐れ入りましたとは言はれ

ない。

「よろしう御座いますとも、御供いたします、もう百石の御加増は頂戴したやうなもので御ざる。」

と、平氣でゐます、いよく仕方がないから明日は猪狩に行く途中で逃げるつもり、何、この國にはばかり御日様が出るのではない、お日様と米の飯は何所へ行つてもあるのだと、根が呑氣な福太夫、覺悟をきめたあとは洒蛙々々したものです。

いよくその翌日になりました、福太夫が狩装束をして御殿へ出たときには、もう殿様をはじめ、お供の人々

まぐれ當り





も五六十人、仕度をして待つてゐました。

「あゝ、これ／＼福太夫、其方に馬を遣はす、これよ、誰か福太夫に馬を引いて来てやれ。」

と云ふ仰せ、近習の若侍が早速御厩から立派な三才駒に、美事な鞍を置いて曳いて來ました。

「福太夫どの、御召しなされ。」

「恐れ入ります、有り難く頂戴いたします。」

と、馬に乗つて、殿様と並んで出かけるここになりました。

「福太夫、今日は仕損じるやうなことはあるまいな。」



「大丈夫で御ざいます、そのかはり首尾よく目を射とめましたらば百石の御加増は御間違ひないやうに御願ひ申しあげます。」

「その方が申す通り、猪の目を射通したらば、百石はおろか、二百石遣はす。」

「有り難う御ざいます、今から御禮を申上げてをきま

す。」

「まだ早いわい。」  
「もうきつと仕こめますから、御加増を頂いたも同じで御ざいます。」







まぐれ雷り

福太夫は、どうせ途中で逃げ出すつもりだから、大きなことを言つてます、それが殿様や家來たちには、いかにも強さうに聞えるのです、途中で逃げやう〜と思ひましたが、中々隙がありません、そのうちにいよいよ猪のあると云ふ山へ参りました、

『さあ、福太夫、これから狩に取りかゝるのだが二百石の加増になるか、浪人するか、勝負のわけ目ちや、落ちついてやれ。』

『二百石は頂いたも同然、それでは殿様一足お先へ御免下さい。』



と言ひながら、馬の口を山の方へむけて、むやみに鞭をあてましたから、若駒はまつしぐらに駆け出しました、

『これノ、福太夫待て。』

と呼びましたが、逃げる考の福太夫は聞えないふりをしてどんく木立の間や、小川をはね越え、草を踏みにちりながら馬を飛ばせます、まさか福太夫が逃げるとは思はないから、殿様はじめ、家來の面々もうれ〜山中へ飛び込んで獸を狩り出しました。

所が、福太夫がドンく逃げて来ますと、ちよつこし

まぐれ雷り



た日當りの場所があつて、此所に一疋の大きな猪が秋の日をあびて晝寝をしてゐましたが、福太夫が馬に乗つて駈けてくるのを見てびつくりしたものと見え、目的もなく飛び出して、六七間離れてゐた所の、藤や葛の大藪の中へ入りました、猪は面食つて逃げやう／＼ともがくと煩悶は煩悶くほど藤や葛蔓に絡まれて七轉八倒の苦しみをしてゐるのです。

『しめたッ。』

そばかり、馬から降りた儘、弓も矢も投げすて、そばにあつた手頃の棒で、



『こん畜生々々。』

と、二三度殴りつけると、急所に當つたものと見えて流石の大猪もコロリと死んでしまひました。

『はゝあ、うまいぞく。』

と言ひながら、福太夫は投げすてた矢を拾つて来て、猪の眼へフツリと突きさし、その儘藪の中から引きずり出しました。

その時、丁度あとに殿つた花下長門守は、福太夫が亂暴な馬の乗り方を心配してあとから上つて來ました。

『福太夫く。』







まぐれ雷  
「洞尾氏、々々々。」

など、家來の人々も聲をかけながらやつて來ました。福太夫は殿様の姿が見えましたので、大きな咳ばらひをして、

「エヘン、エヘン。」

「福太夫いかが致した。」

「エヘン、エヘン。」

「變な咳拂をするな、如何したのだ、馬から落ちたのか。」

「馬から落ちる所ではございませぬ、エヘン、御約束に



よつて二百石頂戴します。」

「何を申す、山へ來たばかりで二百石は遺はされねわ。」

「ご覧下され。」

と、そこへ大猪を引つばつて來ました。

「何だそれは。」

「お約束の猪でございます、首尾よく目な射とめました。」

「何ッ。」

と、ご覧になると、成る程大猪の目に矢が突立つて死んでゐますから、殿様も驚きました、

まぐれ雷





まぐれ當り

『やア福太夫、美事な腕前ぢや、それでは約束通り二百石の加増をやらう、どうも福太夫はエライ、エライ。』  
と、褒めちぎつてゐます。  
家來の人々も驚くばかりでした。  
それから殿様はじめ家來の武士たちも、山中を駆けめぐつて、いろ／＼の鳥獸を狩りましたが、一番よくつて雉子か兎、とても福太夫の猪に勝る獲物はありませんでした、花下長門守は非常に二機嫌でお城へ歸るとすぐ福太夫を呼び出して、二百石のご加増をやつたと云ふことです。



### 一四 蛙の王様

山奥にひとつ古沼がありました、四邊はぼう／＼として草が生ひ繁つてゐて、虫や獸が澤山住んでゐました。此の沼には夏も冬も、水を満々とたゝえ、青々としゐますが、中には何百萬ご云ふ蛙が棲んでゐて、夜となく晝となく鳴き騒いで居りましたが、此の澤山の蛙は毎日々々喧嘩はかりしてゐました。

強いものは弱いものを倒し、弱いものはいつも強いものに攻められて安心すると云ふ日はありません、これで





はならぬと思つたものでしたから、ある日のこと、この蛙が集つて會議を開きました、帝國議會のことを日比谷の蛙評議と云ふのは、この蛙の會議のここから名が付けられたのでせう。

『私共は、た互に同じ蛙であつて喧嘩ばかりしてゐるのは甚だよくないと思ひます。』

と、一疋の利口さうな蛙が言ひました、

『ヒヤ〜、仲間同志で喧嘩するのは、人間のやうでみつともありません、これはすぐに改めなければなりません。』



『喧嘩を止めるには、何故喧嘩がはじまるかと云ふことを考へなければなりません。』

と、又、利口さうな蛙が言ひました、

『それはみんなが慾が深いからだと思ひます、人のものを欲しがつたり、自分のものを取られまいと思ふから喧嘩がはじまるのです。』

『慾の深いと云ふことも喧嘩のたねですが、慾があればこそ生きてゐられるのですから、この慾を取つてしまふことは出来ません。』

『それでは如何したらいいのですか。』



「われ／＼の仲間なごみで王様わうさまを拵こしらへるのです、そして喧嘩けんかのあつた時には、王様わうさまに善悪ぜんあくを裁判さだめて貰もらつて、善いものは助け、悪いものは懲こらすやうにするのです、さうすれば□けんか嘩は少すくくなると思おもひます、人間にんげんの國くににはそれ／＼王様わうさまとか、殿様とのさまとかいふものが國くにを治さめてゐます。」  
と、言いひました。



### 蛙の王様終

大正十年十月七日印刷  
大正十年十一月廿七日發行

【定價五十錢送料四錢】

童話新集  
蛙の王様

著者 初島順三郎

發行者 東京市淺草區瓦町二十四番地  
中村惣次郎

印刷者 東京市神田區豐島町三十四番地  
小笠原幸吉

發行所 東京市淺草區瓦町二十四番地  
中村書店

(電話下谷四九三一番)  
振替東京一一六一六番



童話新集

定價一冊金五十錢  
送料一冊金四錢

第 八 編	第 七 編	第 六 編	第 五 編	第 四 編	第 三 編	第 二 編	第 一 編
鴉	猿	蛙	山 羊	鷄	小 猫	銀 色	狐
の	の	の	の	の	の	の	の
お	醫	王	母	時	大	小	恩
詫	者	様	さ	計	盡	返	返
び	様	様	ん	計	盡	鳥	し



1787  
8



終